

教 育 長 様

研究コース	
A グループ研究 A	
校園コード (代表者校園の市費コード)	
732665	
選定番号	A145

代表者	校園名 :	大阪市立墨江丘中学校
	校園長名 :	進藤 文代
	電話 :	6674-3612
	事務職員名 :	颶田 涼介
申請者	校園名 :	大阪市立墨江丘中学校
	職名・名前 :	主務教諭 尾松 大義
	電話 :	6674-3612

令和 6 年度 「がんばる先生支援」研究支援 報告書

◇令和 5 年度「がんばる先生支援」研究支援について、次のとおり報告します。

1	研究コース	コース名	A グループ研究 A	研究年数	継続研究 (2 年目)
2	研究テーマ	人間関係形成力育成プログラムの開発			
3	研究目的	今日、少子化、核家族化、情報化等が急激に進み、生徒を取り巻く環境は大きく変化している。家庭や地域社会において、人の関わり方を身に付ける機会や直接の体験を通して学ぶ生活体験、自然体験の機会が減少している。このことは、集団の中で人間関係をうまく築くことができない生徒を生み、いじめや不登校等さまざまな問題を引き起こす一因となっていると言われている。さらに集団内のいじめや不登校等による自己肯定感やコミュニケーション能力の低下が指摘されている。本校は過去 3 年間仲間づくりの活動を各学年で取り組んできたが、系統だったものになっておらず、探求学習がもたらす本来の結果を生むことができていなかった。そこで今回の研究を通して 1 年生から 3 年間を見据えた系統だったプログラムの分析・開発を行う。日々の様々な場面において、人間関係調整力を直接的に育成するための手立ては非常に有効である。様々な集団活動を通して相互にかかわり合い、具体的な課題に取り組む中でよりよい人間関係を構築していく営みを体験させることで、実感として人間関係調整力を獲得することを通して育成を図ることをねらいとする。			
4	取り組んだ研究内容	<p>いつ、何のために、どのようなことを実施したのかを具体的に記載してください。(MS シック 9.5 ポイント)</p> <p>本研究は、少子化や情報化社会の進展に伴い生徒同士のコミュニケーション能力が低下し、人間関係形成に課題を抱える現代の状況を踏まえ、教職員の指導力向上を通じて生徒の人間関係形成力を育成することを目的としている。研究 2 年目の今年度は、1 年目の成果と課題を踏まえ、新たな研修と実践的な取り組みを展開した。</p> <p>研究初期には、1 年目の振り返りから課題点を明確化し、解決に向けた仮説を設定。学級開きでは、生徒間の信頼関係を築き協働学習の基盤を整えるため、仲間づくりをテーマにしたアクティビティを実施した。ロングタイムドミノやペーパータワーなどの活動を通じて、生徒同士の協力と対話が促進された。また、総合的読解力育成の時間では、ブレインストーミングやマンダラチャートを導入し、意見交換や思考の可視化のスキルを高める機会を提供した。</p> <p>6 月には、神戸三宮で探究型校外学習を実施し、生徒たちはグループ活動を通じて仮説立案や検証のプロセスを体験させた。この活動により、課題解決に向けた生徒の基礎力が強化された。</p> <p>教職員研修では、教育と探求社による知識構成型ジグソー法の導入や、ロジカルシンキング研修を実施。これにより、生徒が主体的に学ぶ場を設計するスキルが向上し、探究型学習を教育課程に取り入れる際の課題解決が可能となった。また、クリティカルシンキングをテーマにした研修では、対話を通じて生徒の意見を引き出すスキルが教職員に定着した。研修の成果として、修学旅行の事前学習で行っている隠岐の島の島おこしプラン作成では、調査設計や指導力が生かされ、生徒が主体的に学びを深める姿が見られた。</p> <p>昭和学院中学・高等学校の視察では、教科横断型学習や地域課題をテーマにした探究学習の実践例を学んだ。特に、カリキュラムの柔軟な設計と多角的な視点で学びを促進する手法は、教職員の授業改善に大きな示唆を与えた。</p> <p>3 学期には、住吉区と大阪市の観光地の比較をテーマにした探究型校外学習を実施。この活動では、生徒が地域特性を考察し学びを深めると同時に、教職員が研修で学んだスキルを活用して、生徒たちが協働的に課題解決に取り組む場を設計した。また、クエストエデュケーションのアンケート結果を分析し、探究型学習の成果を定量的に検証した。</p> <p>本研究を通じて、教職員は指導力を向上させ、生徒が主体的に学ぶための環境づくりが可能となっている。これらの成果を基に、次年度は「墨江丘スタイル」の探究型カリキュラムを構築し、地域や自然をテーマとした持続可能な学びを展開する予定である。これにより、生徒の人間関係形成力をさらに向上させ、学校全体の教育力を高めることを目指す。</p>			
5	研究発表等の日程・場所・参加者数	研究発表等を実施した日・場所・参加者数を記載してください。			
	日程	令和 7 年 1 月 14 日		参加者数	約 30 名
	場所	大阪市立墨江丘中学校			
	備考				

	<p>大阪市教育振興基本計画に示されている、子どもの心豊かに力強く生き抜き未来を切り開く力の向上および教員の資質や指導力の向上について、申請書に記載した検証方法から得られた結果と、それからの結果に基づいた考察を、具体的に記載してください。</p> <p>【見込まれる成果1】</p> <p><input checked="" type="checkbox"/> 子どもの心豊かに力強く生き抜き未来を切り開く力の向上 <input checked="" type="checkbox"/> 教員の資質や指導力の向上</p> <p>大阪市立墨江丘中学校教職員授業力向上を行う。 授業の在り方研究研修、伝達研修を行い生徒の感情にアプローチしたコーチング等を用いた授業展開の研究を行う。</p> <p>『検証方法』 学校アンケートより、保護者・生徒アンケートの分かりやすい授業の評価ポイントを昨年度より（生徒アンケート）平均2ポイント以上向上する。（学校アンケート）</p> <p>〔検証結果と考察〕 学校アンケートの結果、「分かりやすい授業」の評価が、生徒アンケートにおいて昨年度の90.6%から今年度は95.3%に上昇し、4.7%の向上を記録した。目標としていた平均2ポイント以上の向上を大きく上回る成果が得られた。 この結果は、教職員研修や授業改善の取り組みが効果を発揮したことを示している。ロジカルシンキングやICT機器を活用した授業設計、グループ活動の充実により、生徒が主体的に学ぶ姿勢を育成できたことが評価向上に寄与したと考えられる。保護者からも「授業内容が具体的で、家庭でも子どもが話題にするようになった」などの声が寄せられ、授業の分かりやすさが家庭学習にも良い影響を与えていることが確認された。 一方で、全ての授業で分かりやすさを実感しているわけではないという意見もあり、教員間の情報共有や授業の均質化が今後の課題である。今回の成果を基に、さらなる授業改善を進め、全生徒が分かりやすさを感じられる授業を目指していく。</p> <p>【見込まれる成果2】</p> <p><input checked="" type="checkbox"/> 子どもの心豊かに力強く生き抜き未来を切り開く力の向上 <input type="checkbox"/> 教員の資質や指導力の向上</p> <p>探究学習を通して、友達と協力して学習や活動に取り組むことで、人間関係形成能力の必要性に気づく。</p> <p>『検証方法』 プログラム実施前後のアンケートより、子どもの学びに関する項目設定を行い、意見の違う人とも、わかり合えるまで話し合う必要があるという肯定的回答を85%以上肯定的回答を目指す。</p> <p>〔検証結果と考察〕 プログラム実施前後のアンケートでは、「意見の違う人とも、わかり合えるまで話し合う必要がある」という項目の肯定的回答が、実施前の63%から87%に上昇し、目標の85%を達成した。この結果から、プログラムが生徒の対話意識を高めるのに効果的であることがわかった。 アサーティブコミュニケーション研修やグループ活動が、生徒に意見交換の重要性を体験的に学ばせる機会となった。また、ブレインストーミングやマンダラチャートの活用によって、他者の意見を整理し共有するスキルが向上したこと、肯定的回答の増加につながったと考えられる。 一方で、「相手の意見を受け入れる際に葛藤を感じる」という課題も見られた。次年度は、意見調整の具体的な方法を学ぶ機会を設ける必要がある。今回の成果を基に、持続的な対話力の育成を目指して取り組みを続ける。</p> <p>【見込まれる成果3】</p> <p><input checked="" type="checkbox"/> 子どもの心豊かに力強く生き抜き未来を切り開く力の向上 <input type="checkbox"/> 教員の資質や指導力の向上</p> <p>探究学習を通して、友達が話すことや聞くことの大切さを知ることによって人間関係形成能力が身に付く。</p> <p>『検証方法』 プログラム実施前後のアンケートより、「協働的な学び」に関する項目設定を行い、自分の考えたことを意見交換したり、議論したりして新たな考えに気づき、学習を深めることに役立ったという肯定的回答を85%以上肯定的回答を目指す。</p> <p>〔検証結果と考察〕 プログラム実施前後のアンケートでは、「自分の考えたことを意見交換したり、議論したりして新たな考えに気づき、学習を深めることに役立った」という項目の肯定的回答が、実施前の68%から89%に上昇し、目標としていた85%を上回る結果となった。このデータは、プログラムが生徒の協働的な学びを促進するうえで効果的であったことを示している。 特に、探究型学習の中で実施されたグループディスカッションや、仮説立案から検証までのプロセスが、他者の意見を受け入れ、新たな視点に気づく機会を提供したことが成果につながったと考えられる。また、ブレインストーミングやマンダラチャートなど、思考を整理し共有するためのツールが、生徒同士の議論を活性化させた点も効果的だった。 一方で、一部の回答から「意見交換の際に自分の考えを十分に伝えられなかった」という声もあり、今後は自己表現力を高める指導の強化が必要だと考えられる。今回の結果は、協働的な学びを推進するプログラムの有効性を示しており、今後もこの成果を基盤にさらなる改善を図る。</p>
6	成果・課題

6	成果・課題	<p>【見込まれる成果4】</p> <p><input checked="" type="checkbox"/> 子どもの心豊かに力強く生き抜き未来を切り開く力の向上 <input type="checkbox"/> 教員の資質や指導力の向上</p> <p>対話力・コミュニケーション能力の向上 生徒の興味関心を高め、ICT機器の操作能力の向上を行う。</p> <p>『検証方法』 プログラム実施前後のアンケートより、子どものICT機器使用に関する項目設定を行い、グループで活動したり話し合ったりするときなどにタブレットを使うことは、友達のいろいろな考えを知り、学習を深めることに役立ったという肯定的回答を85%以上肯定的回答を目指す。</p> <p>【検証結果と考察】 プログラム実施前後のアンケートでは、「タブレットを使うことで友達の考えを知り、学習を深めることに役立った」という項目の肯定的回答が、実施前の72%から90%に上昇し、目標の85%を上回った。これにより、ICT機器を活用した学びが生徒の協働学習を促進するうえで効果的であることが確認された。 特に、タブレットを使ったブレインストーミングや調査結果の共有、プレゼンテーションの作成が、他者の意見を理解しながら自身の考えを深める活動を支えた。また、意見を可視化することで、議論が活性化し、グループ全体での課題解決力も向上したと考えられる。一方で、一部の生徒からは「操作に慣れていないために活動がスムーズに進まなかった」という意見も見られた。この課題を解消するためには、タブレットの基本操作や効果的な活用方法をさらに指導する必要がある。今回の結果は、ICT機器が協働的な学びを深める強力なツールであることを示しており、次年度以降は、活用スキルの向上とさらなる応用方法の探求を進めることで、生徒の学びをより一層充実させていく。</p>
		<p>【研究全体を通した成果と課題】 研究発表会等で使用した資料や研究冊子から引用し、端的に記述してください。</p> <p>1. 新規研究（1年目） ※継続研究2年目以降は1年目の記載をコピーして貼付する 中学校学習指導要領第2章第4節理科には「自然の事物・現象に進んでかかわり、目的意識をもって観察、実験などを行い、科学的に探究する能力の基礎と態度を育てるとともに自然の事物・現象についての理解を深め、科学的な考え方や考え方を養う」と書かれている。このように新学習指導要領でも「探究」の重要性が書かれている。生徒を抑えつけて、静かに座って授業を受けさせるよりも、いかに生徒の学習意欲に火をつけ、積極性をもって授業に参加させることができると考えている。また、中学校学習指導要領第1章総則第4では「各教科等の指導に当たっては、生徒の思考力、判断力、表現力をはぐくむ観点から、基礎的・基本的な知識および技能の活用を図る学習活動を重視するとおもに、言語に対する関心や理解を深め、言語に関する能力の育成を図る上で必要な言語環境を整え、生徒の言語活動を充実すること。」と書かれている。このように「全教科での言語活動の充実」が挙げられている。これは1つの教科だけでは対応できないので、全教科の先生の取り組みが必要となってくる。今後も探究学習を通して、講義形式の一方通行である教師主体の授業ではなく、生徒自らが探究する生徒主体の授業を目指していきたい。</p> <p>2. 継続研究（2年目） ※継続研究3年目の場合は、2年目の記載をコピーして貼付する 本研究を通じて、生徒の学びの姿勢や教職員の指導スキルに明確な向上が見られた。探究型学習では、生徒が主体的に課題を見つけ、意見を交わしながら解決策を探る姿が印象的だった。例えば、総合的な学習の時間では、「友達の意見を聞くことで、自分の考えを整理できた」という生徒の声が聞かれ、ICT機器を活用した意見の可視化が議論を深める助けとなった。 教職員研修では、探究型学習の進め方を学び、対話型授業や協働的な学びを設計する力が向上した。特に、ロジカルシンキングやクリティカルシンキングを取り入れた授業では、生徒の主体的な参加が増えた。一方で、一部の生徒がICT機器の操作に苦手意識を持つことや、探究型学習の全教科での統一的な実施には、教員間の連携が不足している点が課題として挙げられる。 中学校学習指導要領第1章総則第4にある「思考力、判断力、表現力」の育成や「言語活動の充実」に向けて、今回の成果は一定の効果を示している。今後は、生徒への個別支援を充実させるとともに、全教科での連携を深め、持続可能な探究型カリキュラムを構築していく必要がある。</p> <p>3. 継続研究（3年目）</p> <p>《代表校園長の総評》</p> <p>1. 新規研究（1年目） ※継続研究2年目以降は1年目の記載をコピーして貼付する 生成AIの進化、ロボット、機械化の加速化が進む社会変化の中、今までの既存の教育の在り方では、社会と学校とが繋がらない場面が多くなってきてている。そんな中、探究のテーマの中、子どもたちが社会の課題に対してどのように向き合って行くかのトレーニングを行い、紙を見てのプレゼンは本校では無く、事前の準備と自分の言葉で発表する習慣を確立することができた。社会の中での発言する突破力と課題を共に乗り越える人間関係形成能力の向上は不可欠なものとなっている。さらに研究を深め、大阪市の教育に一石を投じる仕組み作りを2年目以降さらに期待し進めていってもらいたい。</p> <p>2. 継続研究（2年目） ※継続研究3年目の場合は、2年目の記載をコピーして貼付する 探究型学習研究2年目を迎え、子どもたちが自分の言葉で研究成果を発信する力が目に見えてついてきている。課題解決能力の向上により、地域活性化としてシャッターハートの実現した。区長、メディアにも注目され、子どもたちの成功体験は人間関係形成能力、未来を切り拓く次世代の学力向上につながっている。更に探究型学習の研究を進めることを期待する。□</p> <p>3. 継続研究（3年目）</p>